

## 正書法教育わが意を得たり

桑原 三郎

(慶応義塾幼稚舎教諭・実践女子大学講師)

### ある種のパーソナル・ヒストリー

廊下を歩いていると、音楽室から子供達の歌が聞こえてくる。きれいな、清潔な、伸びやかな少年少女の歌声に、思わずたたくみ、全身を耳にしたいような気持で、聞きほれる。ああ、ここは小学校だなあ、とあらためて思う。トルストイではないが、人生で最も美しい、詩的な、少年の時代を、あの子達は、今ここで、歌っているのだと思う。

誰でも一生に一度だけ、この詩的な時代を生きるのだが、少年の日々は、時に、あまりに早く過ぎ去る恨みが無いでもない。それにしても、あの詩的な時代を、今日に生きる子供達に、出来ることは何でもして上げたい、と思った。

私が慶応義塾大学の心理学を卒業したのは、昭和23年の3月、21歳の時であった。卒業したら何をしようかという気持も、別に無かった。大学院に残って、もう少し勉強したいとも思ったが、成績も特に良いというわけではないし、家でも、そんな余裕は無いという。

卒業も近い一日、主任教授の横山松三郎先生に、そんな事情をお話申し上げ、相談にのって頂いた。とある日、幼稚舎の先生にならないか、と先生から話があった。返事はなるべく早くということで、先生のお話があってから、一時間も経たないうちに、「では、宜しく願い致します」と返事をした。先生からお声をかけて頂いたのだから、お断りしてはいけない、と思ったのである。

それにしても、小学校の先生になろうなどとは、それまで考えたことも無かった。子供を相手の仕事をする気持も全く無かった。何しろ、自分自身がついこの間まで子供だったし、青年になってからは、未っ子の私は、周辺に子供がいなかった。従って、子供にあまり接したことがなく、まして、少年の日々が人生で最も美しく、詩的なものであるなどとは思わなかった。大学で学んだのも、児童心理学などではなく、こちこちの実験心理学で、卒業論文は感情に関する実験のレポートであった。

当時の幼稚舎長は吉田小五郎先生であった。塾の史学科の出身で、大学卒業と同時に幼稚舎に勤められ、爾来数十年、無遅刻無欠席の、幼稚舎の主ぬしのような方である。知る人ぞ知るキリシタン史の碩学で、花を愛し、又、子供が大好きである。私は、この吉田先生にお目にかかり、就職が内定した。先生は、「どうか幼稚舎に一生居て下さい」と、おっしゃった。行きがかりで、ついつい、「はい」とお返事を申し上げたのが、今日まで、私が幼稚舎に踏みとどまった一つの原因である。

幼稚舎は、伝統的に、担任が受け持ちのクラスを一年生から六年で卒業するまで持ち上がる仕組になっている。新任の私は、一年〇組の担任となった。子供というものを自分の責任において世話し、勉強を教えてゆくという仕事は懦夫をしも、大いに奮い立たせるものがある。と同時に、疑いを知らない眼で懐かれると、弱い。この子供達のために、出来ることは何でもしたいと思った。山や野に、何度も一緒に出かけた。よく運動をし、よく本を読んでやった。眼をつぶると、朝吹君、石井君、岩上君……と45人の一人一人の名前と童顔が今でもす

らすらと浮かんでくる。

6年が過ぎて、初めての卒業生を送る時には、それこそ涙が滂沱として止めようがなかった。そんな子供達が今や34歳になる。朝鮮戦争のあった昭和26年には、四年生であった。この子供達が大きくなるまで、日本は平和であるだろうか。もし平和であって、成人したこの子供達と一緒に、共に過ごした昔の日々のことを話し合うことが出来るとするのなら、もうこの上の仕上げは無いだろうと思ったりしたことを覚えている。幸いに日本は平和で潤沢な世の中となり、大きくなった子供達と、会う機会には事欠かない。有難いことである。

先日も、私の教えた4つのクラスが合同でクラス会をした。最初のクラスは長男のようなもので、次に受持ったクラスは次男、更に、三男、四男という具合で、それぞれ特徴がある。6年という年月も短いようで長く、長男は私の二十代、次男は三十代前半という具合に、確実に私に時を刻みつけてゆく。子供達に、私の出来ることは何でもしてやりたい - その出来そうなことが、年齢に応じ、経験や知識に応じて、移り変わり、多少はふえていったように思う。

次男のクラスから、生徒に毎日、日記をつけさせて、提出させることにした。毎日48入の日記を見ることは、最初は不可能のように思われたが、コロンブスの卵で、やれないことはない。この日記のお蔭で子供達が何を考えているのかよく解るようになった。それに、何かちょっと書いてやることによって、個々の子供と対一の交流の出来るのが好い。今では、幼稚舎では多くのクラスが生徒に日記をつけさせている。

三男のクラスを教えている頃から、私は国語の教科書の表記のあり方に疑問をもつようになった。何しろ二年生の時に「明かるい」と教え

たのが、五年生で改められ、「明るい」と教えなおさなければならなかった当時の教科書の表記の在り方が面白くなかった。

そんな時、たまたま読んだのが、石井勲という人の『私の漢字教室』である。私はすっかり共鳴した。

4回目の一年生を私が受持ったのは昭和37年の春で、私は、舎長の許しを得て、断然石井方式にのっかって、国語を教えることにした。石井方式というのは、一つの言葉に一つの正しい表記を定めて、それを一年生から徹底するという教え方である。日本では、「やま」という言葉を書くのに、「山」も「やま」も「ヤマ」もある。大人は普通には「山」と書き、子供は、学校で最初は平仮名で教えられ、次に漢字で書くことを学ぶのである。この二段階方式をやめて、大人が書く漢字仮名混りの表記を、一年の最初から教えようというのである。

このためには、教科書の文章の中で、漢字で書かれるべき言葉があると、一つ一つその長さを削り、教科書の仮名文字の上に糊で貼りつけられるように、漢字を騰写版で印刷しなければならなかった。騰写版で印刷するのも大変だったが、それを一つ一つ切って教科書に貼る父兄も、音を上げたかったに違いない。慰めは、ただ一つ、子供達が苦もなく、警異的な速さで漢字を読んでもくれることであつたらう。その子供達も、今では大学の二年生になる。

漢字を一年生から沢山教えることは、一見奇異であり、心ない教師の行いと思われるかも知れない。

然し、小学校一年生の言語生活といえども、なかなか複雑である。

「今<sup>白</sup>は何<sup>白</sup>? 7月3<sup>白</sup>、水曜<sup>白</sup>だよ。白<sup>白</sup>記をつけなくては。」  
というような言葉は不自然ではない。ところで、傍点をつけた「日」と

いう字の読みを平仮名で書いた時に、その意味の関連は全く意識することが無い。それに対して、象形文字である「日」という漢字が、お日様を表すことを教えるのは難しくないし、一日が、お日様が上って沈むまでだということも、たやすく理解させることが出来る。つまり、音訓の入り混った日本語の語彙の相互の関連に気づかせて、子供の思考を明晰にさせることが、漢字を教える主な狙いなのである。

それに、子供が人の顔を見覚えるのに、目がどうで鼻がどうだからお父さんと理解するわけではない、ということを感じるのである。漢字も同様である。全休の形から、何という字だ、と覚えるのだ。大鵬の現役時代、大鵬という漢字が読めなかった子供は少なかったことを思い出して頂きたい。

大体、言葉の学習というものは繰り返しが大事である。知らない言葉も文の前後の関係で、何とか察しをつけて理解し、それを繰り返している間に、正しい使い方を身につけるのである。だから、漢字も一度で覚えさせようとするのが誤りだと思う。何度も繰り返し出会ううちに、自然に身につくのが好いと思う。

昭和43年、5回目の一年生を迎えた時、私は、教科書に漢字を貼ることはやめて、正書法による副読本を作ることにした。自分が子供達に読ませたい文章 先人の遺した優れた童話、童謡、ノン・フィクション等を、正書法で書き直し、印刷して、それを教えたのである。父兄に手数をかけたくなかったこともあったが、教科書以外の素敵な文章に子供を触れさせたかったからである。国語の教育は、単なる漢字教育であるより以上に、心の伝達であると思うのである。

こうして、6年間で12冊の副読本が出来た。子供にも僕にも、楽しい思い出となった。その子達は今中学二年生である。

教育というものは、教師と教え子の間に信順と愛情が無ければ、どうにもならないと思う。そして相互の愛情が育つと、教師も親と同様に、子供達のためにこうもしたい、ああもしてみたいと思うようになるのである。

思いもかけない職場であったが、清らかで詩的な子供達の日々のために、思う存分、創意工夫を生かされたよい学校に勤められ、素敵な教え子にめぐり会えたのは、何よりの幸せであった。

(「日本経済新聞」昭和50年8月13日)

### 石井勲著『私の漢字教室』を読んで

石井勲氏の『私の漢字教室』(昭和36年、黎明書房)は、夏休みに出かけた北陸の旅の途中、金沢市で買って、帰る途に読み終った。

大変よい本である。全体にけれんがなく、文章に無駄がなく、言わんとするところを正直に書いているので名文である。大体、国語教師の文章というものは、紺屋の白衿でもあるまいが、実に要領を得ず、晦渋で、すらすら読めるものが珍しい程である。

『私の漢字教室』は、書かれている内容が、正書法を定めて一年生からそれを徹底すべしという、いわば国字教育に於けるコペルニクス的展開とも言うべき画期的な提案である。行間に、これからの日本人のありかたを左右する日本の教育の現状について憂国とも言ふ可き感情が流れている。心の洗われる想いがした。

石井氏は戦後、山梨県都留高等学校の先生をして居た人で「よい高校の教師であるために、中学教師から出直してやってみる」必要を感じ、昭和25年八王子の中学校に転じ、次いで「小学校では6年間にこれだけの力しか養えないのだろうか」と感じるようになった。26年、

市の教育委員会指導主事となった石井氏は、市内の高、中、小学校を担当し、国語教育の実際を見聞きするにつけ、国語教育、<sup>なかんずく</sup>就中漢字教育に対する疑問を深めるようになった。漸く自分の胸中に熟して来た新しい方法をぜひ小学校一年生から試みてみよう、石井氏は小学校教師の免状を得る為に努力を重ね、28年、新宿区立淀橋第一小学校に担任として赴任する機会を得たのである。石井氏は日頃念頭にあった、漢字教育の新しい実験をいよいよ始めることになった。

文部省の指導要領国語科の場合、小学校一年生はまず、ひらがなが教えられ、つづいて漢字46字(一から十までの漢数字を含む)が教えられることになっているが、石井氏は、前年の予備実験の結果に基づいて、2年間におよそ220字の漢字を提出し、150字の習得をねらうことにした。そして、漢字の提出に当たっては「漢字で表記するのを本則とする言葉は、最初から漢字で表記して提出し指導する」。無論、石井氏は、漢字を棒暗記させるのではなく象形や会意等、興味深く一年生に話し、猶、何度か繰り返しその漢字に一年生がふれるよう、心を配ったのであった。結果は、当初の目標を越えて、提出漢字が年間300を越え、平均習得字数200余という成績なのである(この場合習得の意味するものは読みの習得をさし、書き取りの習得とは別らしい)。300字の漢字といえば、教育漢字数881の三分の一を越えている。文部省が定めた小学一年生としての標準の実に7倍に当るのである。ところでこの学年がそのまま三年生に達した頃、石井氏は次のように述べている。

「私(石井氏)の学級の子供たちの使っているノートや、作文を見た

先生たちは、異口同音に『六年生以上の書写力を持っている』と感嘆したのであった」。一見石井氏のこの言葉は自慢のようにも聞こえるが、この本全体を読み終った時、誰が石井氏の自慢と認めるであろうか。もっと誠実で真剣なのである。

石井氏は昭和31年に、もう一度一年生の担任となり、今度は普通のやり方つまり、ひらがなを先に教える方法を試みた。結果は明らかに石井氏の予想した通りであって、かなが漢字よりも記憶しにくいこと、漢字は早く又ある程度多く提出する方がより効果的であること等が裏づけられたのであった。

石井氏は、これ等の自己の実験の結果について、それが単に偶然に生まれたものではなく、心理学的法則にのっとっているものだと解釈している。

「漢字はどんなに抽象的なものであっても、それは一つ概念を持っています。ところが、かなはまったく抽象された単なる『音』を表しているに過ぎません。そして、一年生の子供にとっては、どんなに複雑な構造を持ったものであるにせよ、具体的なものでなければ考えることが困難です。物事を抽象的に考えることが困難なのです。つまり、鳥の『と』ということを考えることは、一年生のような幼い子供たちにとっては困難なことなのです。『鳥』という字と、『と』という字とでは、『鳥』の方が覚えやすいのです。それは、鳥の実体はどんな子供の頭の中にも描くことができます。『鳥』という字を覚えることは、その字と頭の中にある鳥の概念を結合させることなのです。ところが『と』だけでは頭の中に何を形作ることもできません。」(本巻第1巻52頁)

「七」や「八」よりも「門」「学校」「黒」「赤」などの漢字の方が習得率がよかったのも、それらの漢字がすでに言葉として子供達によく知られ



ている実在のものであったからに他ならないというのである。象形・会意・形声その他にわたって、漢字の起源の説明が子供達に漢字をより身近に感じさせるのも具体的思考に訴えることになる。抽象的なものの方が具体的なものより高度な理解力を要求することは発達心理学的に当然のことであろう。

第二に、「漢字で書くのを本則とする言葉でも、必ず最初はかな書きして提出し、学習させる。そして子供たちが、それに習熟した後に書き改められて提出され、指導される」ことが「二重の手間をかけさせる」ことであり、心理学に於る遡向抑制並びに順向抑制を伴って、学習能率という意味では、寧ろ甚しいマイナスになるというわけである。これも言われて見ればもっともな話である。漢字を使って表記するのが普通な場合は、国語の習い初めから漢字を書いて与えるという正書法の立場を石井氏がとる所以である。

第三に、石井氏は、漢字の指導は、提出された最初の機会に必ず行うべきものという従来の立場をとらず、字数こそある程度多いがいつまでに習得しなければならないと考えないで、「ひとりでに習得できる」まで、何回でも反復提出され、又、習得後も又繰り返し提出される、という立場をとっている。心理学的立場からすれば、これも素直にうなづけることで、寧ろ、従来の新出漢字を、その読みは勿論、意義から書き取りまで一気に完成しようという方が労多くして功少いということに気がつくのである。尤も図語生活そのものをわれわれは、日々反復練習しているわけであるが。

第四に、かなによることばの記憶が、無意味綴の記憶と等しく、覚えにくいのに反し、漢字の場合、論理的構造的記憶となって記憶しやすくなる、ということも述べている。

これはソシユールの所謂「表音文字の表意化」が行われている欧米語の場合でも、語形の固定化として、これが適用されていると考えられる。かな文字論者やローマ字論者が、よく考えてみるべき問題であろう。石井氏は2回にわたる実験から「漢字によって、言葉の理解や記憶が容易になるばかりか、子供たちの思想が精密に分化され深められて行く」という事実を発見したと述べ(同173頁)、更に「作文」「文集」「観察」とかの「複合語を分析的に理解することが、子供たちの思考力を高めるためにぜひとも必要なこと」(同226頁)だとも述べている。

ところで石井氏は、こうした実験結果に基いて、二つの基本原則をたて、新しい国語教育についての提案をしている。

原則の一つは正書法、つまり一般に漢字を用いて表記している言葉は、たとえ相手が一年生であっても、漢字で表記して提出することであり、二つは社会科用語は社会科、理・数用語は理数科で提出指導すべきだ、としている。石井氏は之等の原則に基いて、現在第三次の実験を効果的に推し進めているわけである。

この場合、問題となることは、低学年の場合、従来のようなのびのびした表現に富む作文教育が出来なくなるということで、石井氏はこれについては口頭作文、特に順序立てて話すことの指導に力点を置くべきだとしている。

更に、ひらがなイソップやひらがなガリバーがなくなるとは、幼いうちから、自ら書物を読んで知識を広めたり出来なくなると考えられるが、これは現在の欧米の子どもと同じ条件になるということで、正書法の立場をとる以上、止むを得ぬこととしている。寧ろ正書法をとることが、漢字学習(言語学習の意味も含む)を能率的にし、又精密にする

ことになり、プラス面の方が大きいというわけである。ところで、石井氏の『私の漢字教室』の大きい特色は、正書法の提案のほかに、この本の随所に見られる、氏の国語及び教育に関するすぐれた見解であろう。たとえば、「私たちは、言葉によって物を考えます。精密な思考というものは精密な言葉によらなくては不可能です。従って、理科学習でも、社会科学習でも、まず言葉の意味を正確にしなくては、その学習を進めていくことができないはずで、何によらず、私たちが使用する言葉や文字を、明確にしておいてから話を進めていく態度、これほど基本的で、これほど重要な態度はないと思いますが、またこれほど、日本人に欠けているものもないと思います」(同 110 頁)とか「問題は、漢字がいくつ読めたからよい、というものではないということです。私の提案する学習法によれば、漢字は今までと比較にならぬほど、数多く習得できます。しかし、読める漢字がただ数多いだけでは、大した意味はありません。私が声を大きくして、この学習法を奨めるのは、それによって、子供の思考力が発達し、考え方が精密になることです。第二には、他教科の学習が大いに進むことです。」(同 138 頁)

「『漢字が、国語学習に大きな負担となっていて、そのため、いたずらに時間と労力が多く費されている。欧米では、文字数が少ないため、わが国の半分、もしくはそれ以下の時間で国語学習が完成され、そのため、浮いた時間はもっと重要な科目に振りむけられている』というようなことがよく言われます。一体、どんな事実によって、こんなことを言うのでしょうか。外国の国語教育の実際を知らない人は、この言葉を聞けば『ほんとにそうかも知れない。それなら、漢字など早く廃止して、かなかローマ字にすれば、わが国の科学はもっと進むかも知れない』と、誰だって考えたくありません。それだけに、こういう無責任な、

あるいは、故意に国民をあざむこうとして、作為的に言っているとしたかと思えない、まったく事実と反したことを証拠に挙げることは卑劣だと思えます。(中略)

事実は、アメリカ、ソ連、ドイツ、フランス、欧米における科学の進んでいる国々は、すべて、わが国の 2 倍、もしくはそれ以上の時間を国語学習に当てているのです。(中略)

わが国の国語教育がそのような少ない時間で間に合うなら『漢字は負担が重すぎると』は絶対に言えないはずで、しかも、私の提案する方法に改めるならば、現在程度の国語力を養うには、もっとずっと少ない時間で足りるでしょう。これは、今までの指導の経験から、私は確信を持って言うことができます。しかし、これは、国語の時間をもっとへらしてもよい、ということでは決してありません。それどころか、国語の時間は、もっともっと大幅にふやすべきだと思っています。なぜなら、理科学習も社会科学習も国語で行うからです。理科教育でも社会科教育でも、未熟な国語教育から、りっぱな成果が生れるはずがないからです。欧米諸国で、とりわけ科学の進んでいる国において、理科教育よりも、国語教育に多くの時間を費しているのは、そのためだと考えるより外はありません。(中略)

私は、日本の教育が、あまりにも近視眼的であり、そういう見方に捉われていて、大処高処からの

見方の足りないことを非常に残念に、そして悲しく思います。殊に情なく思いますことは、この明瞭な事実を知らないで『国語の時間を余らせて、もっと重要な理科教育に回すべきである。そうすれば日本の科学はもっと高められるであろう』などという出まかせがまかり通る現状です。」(同 88 頁)

以上、長々と引用したのは、言葉というものが、単なる記号であって、人間の思考とは別であるというような考え方をしてはいけない、そういう考えからは、安直に言葉をいじくって平気で居られるようになるからである。ところが言葉は、人間の思考を支える最も重要なものなのだから、精密な言葉の教育は、精密な人間をつくり出すということに他ならないのだ、というのである。

一年生から理科の時間を設ければ、それだけ科学教育が進んだのだというのは、実はナンセンスで、科学的思考というものは、言葉を厳密な意味で用いることから始まる。その意味では、科学教育は即ち国語教育だと言えるわけである。

小学校の算数の時間に、時間と時刻の意味のちがいを口を酸っぱく説明しても、遠足のお知らせをする時に、「集合時間は八時ですよ。時間に遅れないようにね」などと平気で言っているようでは、いつまでたっても知識が身につかない。言葉というものは、大体こんなものなので、「言葉や文字が良いのも悪いのも、すべて、国民である私たち自身に、その責任があるのであって、決して文字や言葉にあるものではありません。私たちが良ければ、文字や言葉も良くなり、私たちが悪ければ文字や言葉も悪くなる、というものです。それを、文字や言葉があいまいだとか不合理だとか言って、これを改めてみたところで、私たちの生活態度があいまいを好み、不合理なものであるならば、どんな正確な表現も、どんな合理的な言葉や文字でも育たない。(中略)『美しい言葉』というものは、初めからそういうものが存在しているのではなくて、実際には『美しい人、りっぱな人によって語られる言葉』のことを言うのです。」(同 147 頁)とある。

現在の「表音文字か表意文字か」についても、石井氏は鋭く言う。

漢字が初めて日本にとり入れられた時、万葉仮名のように、表音的に使用され、更にこれから仮名が生まれた。ローマ字の場合もそれと同じで、後進国が先進国の文字を借り入れるに当って多く採用される方法として「表音文字」が誕生した。だが、日本人は、単に表音文字として仮名を作っただけでなく、世界にも類のない訓読法を発見したのであった。

表音文字は止むを得ず表音文字となったものだから、機能的には明らかに表意文字に劣っている。その為に、欧米語に於ても語形の固定化が行われ、表意化がなされているのだという。

こういう石井氏の目は当然、漢字制限、音訓整理、送り仮名等の国語改革運動に向けられる。

勝手に好きなだけ使いなさいといわれても、今時三千字以上使える人はまずいないのだし、物を最少限に切りつめてそれに満足する考え方からは進歩も発展も望めない。一体、国語教育は日常の言語能力を養えばそれでよいというものではなく、その外に過去の文化遺産を受け継ぎ、更にそれを発展させる為の能力を養うという大きな任務がある。国語改革の運動は、言語生活の大衆化、能率化を主張するが、寧ろ、学校教育の目標を切り下げたのに過ぎない。その皺寄せが卒業後に及んでいるだけである(杉という字は当用漢字ではないが、今日の社会では明らかに必要である)。「漢字には読み方が幾通りもあるからどう読んでいいか迷わされる」という意見についても、漢字に読み方が幾つもあるのではなく、数多くの同義語を一つの漢字によって兼ねているので、ことばが先にあるから、文字はそれを表現する為に使用されるに過ぎないのだとしている。一つ概念に対して

一つの表記だから、漢字は少しも煩雑ではないわけである。とに角、国民教育が始って以来、ただ仮名を学んでから漢字へという方法だけが金科玉条のように繰り返されて来たことに、初めて疑いを持ち、自ら実験し、多くの示唆に富む結果を手にした石井氏は、これから大いに論議を尽そうと提案しているのである。

考えてみれば、国語がどれだけ愛され、どれだけ国語の教育に情熱が注がれて来たことだろうか疑いたくもなる。尠くとも文部省の学年別漢字配当には「言」を「読」むより二年も遅らせて提出してあることは、石井氏でなくても、納得が行かない。

石井氏の実験についても、読みだけに触れて、書くことの指導についてはよく触れてない。これ等は更に発表されるであろうが、大事な国語の問題である。狂熱的にでなく、論理的に話しあって、吾々の国語をよい国語にしたいという石井氏の態度は立派である。

世は規律なく混乱し、それを反映して国語も規律なく混乱している。救い難い日本のように思われるが、石井氏のような人がいるということを知るだけでも光明を見る思いがしたのであった。

最後に、国語とは関連がないけれども、忘れ得ざる文章として次のように書かれていたこともつけ加えておこう。吾々、教師の精神をひきしめる文章である。

「安易な方法は、日本の文化を高める能力を養えないでしょうし、人間は決してそんな容易さに満足できるものではありません。むしろ、人間というものは、容易に達成できないような奥深い物に対してあこがれを持ち、簡単に征服できるようなものは、決して望まないものです。私は子供たちを一年生から何度か指導してみて、自ら成長しようとする意欲の強いのに驚かされると同時に、子供たちを頼もしく思っ

たものです。子供というものは、甘やかせばかぎりもなく甘えます。しかしそれだけの子供の本心だと考えてはなりません、その半面には困難を喜ぶ気持があるのです。いわば『開拓精神』とでも言うべきものが、子供たちの支えになっているのであって、これは成人よりもむしろ子供たちのものだとは私は思っています。私は、子供たちが、遊びや甘えたい誘惑をしりぞけ、少しでもより高いものを身につけようと、けなげにも努力している姿を今までに多く見えています。」(同 84 頁)

(「仔馬」昭和 36 年 12 月号)